

## 2020年度 博物館実習

# — 受講生のレポートから —

### コロナ禍での実習を終えて

文18-0165 影山 清香

2020年は新型コロナウイルスによる世界的な混乱が生じ、大学生活にも大きな影響があった年だった。春学期は政府からの緊急事態宣言によってすべての授業がオンラインで行われ、博物館実習もLMS上で行われた。オンライン授業では、配付資料や動画を視聴して学ぶという形で行われたため、実習が本当にできているのだろうかという不安が常にあった。秋学期には個人で博物館実習展を企画しなければならず、実習が実際にできないという不安から実習展準備を心配することが多かった。また、予定されていた様々な博物館への訪問や夏休みの東京研修が中止になり、例年ならできていた実習の機会が失われたことがとても残念であり悔しさが残った。緊急事態宣言下では多くの博物館施設も閉館し、実習中に学びに行く機会が少なくなってしまったことにも残念な気持ちがある。

しかし、コロナによる制限のもとで大学生活を送り、当たり前のことへの感謝の気持ちを改めて感じる事ができた年でもあった。オンライン授業を経験して、対面で授業をすることの学びの重要さや、クラスメートと学ぶことの大切さをとても感じた。また、制限の中でも可能な限り実習を行おうと尽力して下さった先生方の熱い思いにも感謝をしてい

る。春学期の授業はすべてオンラインであったが、緊急事態宣言の解除後には対面での補講が行われたり、対面で行われた秋学期の授業では個展での実習展準備をサポートして下さったり、先生方の尽力のおかげで実習を終えることができた。博物館実習以外の学芸員資格の科目で、教員から「関西大学はコロナ禍でも一番博物館実習を行っている」という話があり、改めて実習を終えられたこと、当たり前のことへのありがたさを感じた。

私は1年を通して博物館実習を履修し、学芸員の業務の多さや大変さ、また、仕事の奥深さや社会的役割の大きさを学んだ。3回生で博物館実習を履修するまでに、1、2回生で様々な学芸員課程の科目を履修してきたが、実際に、ほんの一部ではあるが学芸員の仕事を体験したことで学芸員に求められる能力や精神力、大変さ、やりがいなどを実感することができた。実習の前に博物館展示論で展示の仕方やキャプション・展示解説を学んでいたが、実際に実習展で資料を展示しようとするとなかなか上手く配置できなかったり、キャプションでは文字の大きさに悩まされたりと多くの苦労があった。私は実習展で関西大学の創立記念はがきを展示したが、展示するはがきの枚数の関係できれいに展示すること

が難しく、どのように列を描いて配置するか、どの高さから配置するかなど資料の展示には奥深さがあると思った。実習後の先生方の講評のなかに、「学芸員になって、ものの配置にこだわることを知ると私生活でもこだわらずにはいられなくなる」という話があり、ものの配置のこだわりに学芸員の美的センスが求められるのだと思った。また、展示台の高さや照明の当て方も実際に考えることで学ぶことが多く、座学と実習の大きな違いと経験することの大切さを学んだ。資料の取扱についても実習や実習展準備で実際に様々な展示資料に触れ、ものを扱うことの大変さを実感した。授業で資料の取扱を学んだとき、傷みが激しい掛軸を扱ったが、丁寧に扱うことだけではなく、展示してもよい資料であるかを見極めることも重要であることを学び、学芸員は経験することが重要な職業であることも分かった。

2020年の博物館実習展は、例年なら数人のグループで行うはずのところコロナの影響により個人で2点展示をするというものに変更され、ひとりひとりが責任を持って展示を行わなければならなかった。展示資料の選定にはじまり、展示の企画や調査、資料の撮影、ポスター作り、キャプション作成など、例年ならグループのメンバーで分担して行う作業をひとりで行わなければならず、とても大変な思いをして秋学期の前半を過ごしていた。しかし、実習展のすべての作業に責任を持って取り組んだことで、学芸員の仕事の大変さを身に染みて感じる事ができたと思う。また、先生方のアドバイスを取り入れつつも自分で考えて展示作業を行ったことで、より良い展示にするために主体的に取り組むことができ、展示が完成したときに達成感を感じることもできた。今回の実習展では1つの展示ケースの半分を使用した2品展示であったが、

それでも苦労が多かった。だが、小さな博物館では1人の学芸員が企画展のすべての作業を1人でこなさなければならないという話を聞き、実習を終えて改めて学芸員の苦労を知った。実習を通して、学芸員は専門の研究だけではなく資料の保存や展示、教育普及活動、インタープリテーションをはじめとする接客など多岐にわたる業務や役割があることを学び、決して楽ではないがやりがいのある職業であることを知った。以前、博物館経営論で四天王寺宝物館を訪れた時、学芸員の方が「学芸員の仕事は日々様々なことを学ぶことだ」と話してくれたが、まさにその通りだと思った。学芸員には研究活動、博物館業務、博物館の社会への貢献など多様な役割があるからこそ、日々学んでいく姿勢が大切であるのだと思う。

コロナ禍で博物館実習を行ったことで、従来の博物館の課題とともに With コロナ及び After コロナにおける博物館の新たな課題を意識することが多くなった。博物館の様々な課題については学芸員課程の授業で学んでいたが、より博物館問題や学芸員の役割を考えさせられるきっかけを与えたのがコロナであると思う。博物館経営論で、日本の博物館における大手新聞社と組んだ大量動員型大規模展覧会の問題点について、海外博物館からの借用費の問題や巡回展の落札、学芸員が自ら特別展を企画しなくなる等を学んだ。コロナの前では、問題提起はされつつも大量動員型展覧会で観客動員数などの成果を求めて改善することは少なかった。しかし、2020年はコロナウイルスによりほとんどの博物館で大規模展示会が中止になり、移動制限による博物館経営や海外博物館からの貸借などの問題が重大さを増したことで、博物館の大きな変換が急務になったといえる。With コロナ及び After コロナでは、新しい生活様式によって

大量動員型展覧会は困難になり、博物館のあり方や役割の見直しを迫られていると思う。コロナ禍で来館者とリアルなつながりを持てなくなったことは、実物を見せることに意味のあった博物館の存在を変えることが必要であり、これからの博物館にはバーチャル・リアリティやデジタルアーカイブの活用が焦点が当てられるだろう。従来の博物館は、利用者に実際に来館してもらうことで博物館情報を提供し、博物館側が一方的に見せる・教えるという情報提供や教育普及活動が多く見られた。しかし、コロナ禍で制限がある現在では、博物館のデジタル化がますます重要になっていき、インターネットを通して広く公開することが教育普及活動として急務になると考えられる。ステイ・ホームは今後も続くと思われ、従来の博物館では社会教育に貢献していくことは困難であるから、より多くの人々に博物館が持つ学びを提供し博物館活動を社会に還元するために、情報のデジタル化が課題になると思う。多くの博物館では既にデジタルアーカイブなどの活用をしているが、それだけではなく、オンライン上でも博物館展示をより楽しめ、学べるような情報発信をしていくことが必要だ。国立科学博物館のように、「かはくVR」という3DビューとVR映像による展示鑑賞プログラムをオンラインで提供し、館内では見るできない角度から資料を鑑賞したり、普段は気付かれない美しい天井装飾を発信したりと、自館の持つもので新たな価値を提供・発信していくことが重要だと思う。国内外問わず注目されている「デジタルミュージアム」は、パソコンやスマートフォンなどから、どこでも誰でも博物館の展示や所蔵資料を閲覧して学ぶことができるという点で、Withコロナ・Afterコロナにおいて博物館の社会的な役割を果たすことができるだろう。

また、これからの博物館において地域に根ざした企画展示や連帯事業も重要になると考えられる。コロナによって大量動員型展覧会が困難になり、ルーブル美術館や大英博物館などから借用する大規模展示会に採算が見込めない現状では、国内や地域の資料の魅力を見直し発信していくことが必要だと思う。令和3年度から文化庁が「地域と共働した博物館創造活動支援事業」をはじめたように、地域の文化財を活用した地域との共働や地域の魅力を創造していくことが学芸員に求められると思われる。海外作品の魅力だけではなく、コロナ後は国内や地域の魅力を磨き、海外にその魅力を発信していくことが重要だろう。そして、この地域型博物館にもデジタル化が必要で、郷土資料や特定地域のみで知られていた資料をデジタルアーカイブで公開し、研究や学びに広く利用されるように博物館が発信者にならなければならない。コロナ騒動で社会ではデジタル化の動きが活発であるから、デジタル化や地域資料の活用が博物館の今後の課題になると考えられる。そして、学芸員の創造力がさらに求められるのではないだろうか。

コロナによる社会的な混乱のなか、思うようにならなかったことはあっても博物館実習を終えることができたことに感謝をしている。大変な思いをしたからこそ、良い経験になったと思っている。今回の実習で得た、困難な状況でも最後まで取り組む姿勢を、残りの学生生活や社会に出て困難な状況に遭った時の糧にしていきたい。

## 3年間の学芸員資格取得課程を通して学んだこと

文18-0487 中村 真里絵

### はじめに

私は大学入学前から学芸員資格の取得を志しており、1回生の頃から博物館実習の受講に必須である科目に取り組んできた。そして、3回生の時に博物館実習を受講することができた。この3年間で、文化財に関連する専門知識や技術、展示技術や博物館自体の経営法や、社会人になるにあたって必要なマナーなど多くのことを学ぶことができた。本論では、学芸員資格取得課程に必須である授業の内、最も印象に残った授業である博物館経営論で学んだことと、博物館実習で学んだことを順次述べていく。

### 博物館経営論で学んだこと

私が博物館経営論の授業を受講した時期は2回生の後期であり、担当の教員は明尾先生であった。この授業が最も印象的であった理由は、3年間の学芸員資格取得課程の必須授業のうち、唯一グループワークがあったからだ。博物館実習の実習展作業は、本来はグループワークであるが、コロナ禍の影響で個人作業となった。そのため、博物館経営論のみグループワークがあったと言える。グループワークの内容は指定された5人組で選択した博物館にアポイントを取って、実際に足を運び、その博物館のアクセスやショップなどといった経営法を纏めて発表するといったものだった。先生から内容説明を受け、かつ「班の中には働かない人もいます」と仰っており、これを聞いた私は当時、リーダーシップをとる事や発表することが苦手であったため、もしかしたら自分はグループ内で空気に

なってしまうのではないかとかなり不安になったが、グループ全員で取り組むためにはどうすれば良いか、自分には何ができるかを考えた。グループで訪問する博物館は大阪歴史博物館に決定し、グループ内では発表者、アポイント係、パワーポイント係、発表原稿係、カメラ係、土産調達係といった6つの役割が存在していた。私が配属されたグループは元からの友人も存在し、少し安心したが、しっかりグループ内で貢献するために、グループ内で一眼レフカメラを所有しており、写真編集の経験もあった私はカメラ係に志願した。また、近所に評判の良いケーキ屋があったため、土産係も兼任した。そして博物館訪問日では発表係や原稿係、パワーポイント係の指示に従い、また自分の意見も交えながら必要な写真を撮り、訪問日翌日にはパワーポイント係に編集済みの画像データを提供した。そして、発表原稿係やパワーポイント係に積極的に提案を持ち掛け、グループ発表に自分なりに貢献できるよう努力をし、他の人にも意見を求めることによって、グループ全員が参加できるように努めた。

その結果、グループ発表の質がかなり高くなったと同時に、同じグループに所属した人ともかなり仲が良くなった。このグループワークを通して自分が学んだことは、特定の分野が大の苦手であっても、別の自身の得意分野を活かせるようにすれば良いということと、1つの目標を達成するにあたっては、極力全員の意見の参考にした方が良いということだ。確かに、グループワークでは数人は活動に消極的になる人がいる場合もあり、以前の私なら、消極的な立場の一人であったか、



その立場の人をメンバーとして数えずに取り組んでいただろう。しかし、この経験を通して私は、目標の達成度を妥協しないためにも活動に消極的になる人が積極的になり易いような環境を整えることを大事にしたいと考えた。

### 博物館実習前期の授業の取り組みで学んだこと

2020年度前期の関西大学は、コロナ禍によって、全ての授業がオンライン形式となった。博物館実習も例外ではなく、一部の実習授業を除いては全てオンライン形式となった。私は前期の授業は体調を大きく崩していたため、僅かな対面授業に出席することは叶わず、更にオンライン授業に全く慣れていなかったため、出席届が出せていない、期日まで資料のデータが保存できていない、更には提出すべき書類やレポート、実習展で使用する資料の下見が大幅に遅れるといった大失態を犯してしまった。この数々の失敗は後期の対面授業が再開した時点で博物館事務室に赴き、必死に謝罪と対処法を尋ねた結果、解決することができた。このような失態は社会人では到底許されることではないので、後期になり、体調が落ち着いたこともあって私はもう期日までに遅れないことを誓った。そして、オンライン形式でわからないことが存在するなら、電話やメールなどで友人や事務室の方に尋ねる必要があるにも関わらず、それを怠った自身も非常に情けないと感じた。この経験を通して私は、不明な点があるなら先に連絡を入れて確認することと、期日をしっかり確認して課題に取り組む重要性を学んだ。

### 博物館実習後期の授業の取り組みで学んだこと

博物館実習後期の授業で最も印象的であっ

た授業は、実習展作業である。今年の実習展はコロナ禍の影響により、グループワークが個人作業となった。実習展に向けて準備作業を約1か月間行ったが、その際に特に注意した複数の点と実習展で学んだことを順次述べていく。

私は、家に黄檗宗の住職が書いた短冊があったので、関西大学博物館から借用する展示品を黄檗宗の大型の鈴を選択し、黄檗宗の影響が現在の文化に影響を与えていることも示すために家から小型のお鈴も持ち出し、大型のお鈴、短冊、小型のお鈴の3点を用いて実習展を企画した。企画の時点で特に注意したことは二点ある。一点目は展示物やパネルをバランス良く配置することだ。配当された展示ケースの大きさが意外と狭かったり、短冊の展示の仕方に苦戦したり、隣のパネルと配置を合わせたりと、机上の計画だけでは配置を計画することは不可能であるため、なるべく自身の展示ケースまで足を運ぶ機会を増やし、配置に関しての意見を担当の教員や友人に求めた。その結果、多くの教員や友人から「配置がまとまっている展示である」と評価を頂くことができた。しかし、展示の配置の評価の1つに「短冊は無い方が良かったのではないか」という意見もあったため、展示テーマに合う資料探しや配置を反省する必要がある。二点目はお鈴の音を見学者が視聴できるように工夫したことだ。当初は端末を用意することを予定としていたが、コロナ禍でもあり、あまり現実的ではないと判断したため、別の方法はないかと、この課題に対しても友人や担当の教員に相談した結果、お鈴の音源をユーチューブに投稿し、そのURLをQRコードにすると良いのではないかという意見を教員から頂くことができた。そして、実際に音源を動画として投稿し、作成したQRコードをパネルに掲示した結果、工夫点として特

に評価された。しかし、動画内容は音源の動画にお鈴の写真を掲載したものであり、鳴らしている様子が分かりにくいといった意見もあった。今後は、動画は音源だけでなく、大きさや使用方法が分かるように、使用している様子そのものを動画にして投稿すべきだったと言える。

配置を大まかに決定した後、キャプションや説明用のパネル製作に取り掛かった。ここで特に注意した点は、パネルの量と種類である。最初はポスターパネル、展示の目的を載せたパネル、そしてキャプションと展示品の説明を軽く載せたパネル、音源のQRコードを載せたパネルの掲示を考えていたが、殆どのパネルが文字のみになっており、掲示を考えた際に少し見づらいのではないかと考えた。そこで友人たちの意見や展示方法を参考として、黄檗宗に関連した人物像のパネルを二枚用意して掲示した結果、文字だらけの掲示物に安定感が生まれた。しかし私はこのことにこだわり過ぎた余り、パネル作成で二つの失敗をしてしまった。一つ目の失敗は、パネルの文字の大きさや隙間の使い方である。文字に関しては特に振り仮名が見にくいという意見が多数あった。また、文字列の端に沿って切ってしまったため、パネルのデザインが空白の無い見にくいものとなってしまった。二つ目の失敗は展示品の概要説明のパネルの情報が不足していた点だ。特に展示品そのものというよりは、展示品に関係する黄檗宗の説明文がかなり不足しており、勉強不足であるといえ、大いに指摘を受けた。

展示品の配置やパネルの設置が完了した後には、インタープリテーションの準備を行った。ここで特に注意した点は二つある。一つ目は展示品をまず、身近な現代の文化に繋げて説明することだ。そして最後の説明に宗教と展示品、現代の身近な文化の共通点を挙げるこ

とで、展示内容のコンセプトを分かり易く伝えようと工夫した。これは担当の教員に相談した結果、構成できたものだ。二つ目に注意したことは、身振り手振りを付けることだ。説明中に動作を加えることによって、説明に分かり易さと動きを加えようとした。これは友人の意見によって追加された工夫点だ。インタープリテーションの練習は充分に行っていたが、本番では、緊張のあまりかなりしどろもどろになってしまい、小さい声でのインタープリテーションになってしまった。より多くの練習と、発声方法の確認をすべきであったと言えるだろう。

## おわりに

3年間の学芸員資格取得課程を通して特に印象に残った授業の1つである博物館経営論と博物館実習で注意したこと、学んだことをそれぞれ述べていった。これらを総合した場合、私が3年間の学芸員資格取得課程で学んだこと、つまり成果は専門知識だけではなく、「自分にできることを一生懸命行う」、「より良い結果を出すためには周囲の協力の要請を惜しまないこと」といった、一見当たり前で簡単そうに見えるが、実は難しい社会的な立ち回りであることを学べたことだと言えるだろう。そして、今後の課題としては、学んだことをどう生かすかを考えること、学んだことを忘却しないように実習簿や教科書を見返し、コロナ禍が収まったら博物館へ頻繁に通うことであると言える。

## 1. 初めに

私は、博物館実習の授業の中で、実習展を経験し、「展示」という形で人に物事を伝えるということを初めて体験した。そこで感じたのは、レポートやプレゼンテーションなど、言葉を中心に人に物事を伝える行為にはない、展示そのもので他者にメッセージを伝えなければならない難しさである。「展示」を通して人に物事を伝える場合、言葉を最小限にし、資料という最も価値のある情報源に重きを置かなければならない。しかし、資料だけを見せられてもその資料から得られる情報を伝えることはできない。その資料は何で、どのような価値を持っているのか、なぜその資料を展示しているのか、といったメッセージを伝えることができれば、それは「展示」とは呼べない。よって、それらを伝えるために言葉は少なからず必要になるのであるが、言葉を中心に人に物事を伝達するのであれば、それは展示である必要がなくなってしまう。

「展示」を作るということは、人に何かを伝えるという行為の中で、最も難易度が高いものの一つなのではないかと考える。そのため、展示を作るということを解明することで、人に何かを伝えるということの中で必要なことが見えてくるのではないかと推測する。よって、本論文では、博物館の展示はどのようにして構成されるのかということを探ることで、他者に物事を伝えるということの本質を探る。2章では、博物館の展示はどのように構成されているのかということを探る。その上で3章にて、今後、人に物事を伝えるときにその経験が生かせるよう、私自身が作った実習展を振り返る。

## 2. 博物館展示の構成

本章では、展示という伝達手段の特徴について検討し、展示を作るにあたって重要となることを探ることで、どのようにしてメッセージを伝えなければならないかを明確にする。

では、博物館展示を情報の伝達手段として考えたときに、他の伝達手段には無い特徴とはなんだろうか。里見（2014）は、「博物館展示は、専門家ではない観客に『わかりやすく伝え』自ら考える手がかりを与えること」が重要であると述べている<sup>1)</sup>。また、別の言葉で「理解から創造へ誘導するコミュニケーションの役割」があるとも指摘している<sup>2)</sup>。つまり、伝達手段としての博物館展示の特徴として、全てを伝えるのではなく、相手に考える余地を与えなければならないということが挙げられる。相手に興味を抱かせ、「もっと知りたい」というような気持ちにさせる、彼の言葉でいうと「創造」に繋げるコミュニケーションを図らなければならない。これらのことから、博物館の展示は、ただ資料を並べるだけでは、伝達手段としての役割を果たすことができないということが導かれる。資料を見せるだけではなく、相手に興味を抱かせるための工夫が必要である。

では、相手に興味を抱かせる展示とはどのようなものなのだろうか。博物館展示を作る学芸員はどのような工夫を凝らす必要があるのだろうか。これら2点のことについて検討する。里見（2014）は、観覧者の興味を引くためには、「モノで見せ、語りかける」展示を作らなければならないと主張する。そのような展示とは、

あるテーマのもとに語りを展開して見せることになるが、展示の「語り」とは、あるストーリー（筋）が考えられ、それに従って必要と思われる資料が選択され、そして、選択された資料を解説や写真、図表などと共に、空間（ケース内や展示スペース）に展べ広げて示す<sup>3)</sup>

事であると述べている。このことから、博物館展示を作るためには、資料を見せること以前にストーリーを構成することが必要になるということが分かる。ストーリーの上に資料が並べられるというような展示を作らなければならないということだ。更に、学芸員がすべきことのひとつとして、「グルーピングや比較対照させ、あるまとまりとして見せることで意味を与え、意義を伝える<sup>4)</sup>」ことであると指摘する。資料がたくさんある中で、一つ一つの資料には様々な特徴があるので、資料のまとめ方というのは複数通りあるはずである。例えば年代ごとにまとめることもできるし、材質ごとにまとめることも可能である。資料のどの特徴に着目するかで、ストーリーの中でその資料が果たすことのできる役割が変わってくる。学芸員は、博物館展示においては、研究を通して得た資料の情報について全てを伝えるのではなく、ストーリーの要素として資料の一部の情報を伝える中で、観覧者に興味を抱かせることを目指すべきなのではないだろうか。それによって、博物館展示の「理解から創造へ誘導するコミュニケーションの役割<sup>5)</sup>」を果たすことができるのではないかと考える。

以上のことから、博物館展示を通して相手に情報を伝達するという行為の中で重要となるのは、相手に興味を持たせる情報を提供するということであることが分かった。そしてそのためには、資料に付随する情報を取捨選

択し、選び取った情報をストーリーの要素として伝えることで、相手の興味を引く必要がある。つまり、博物館展示は、研究から得られた情報を伝えることではなく、観覧者と資料を繋ぐことを目指して構成することが求められる。つまり、博物館展示では、資料以外の言葉による情報は、ストーリーに乗っ取ったものでなければならず、洗練されたものになるはずである。例えば、年代ごとの分類に基づいたストーリーの中で、資料の材質に関する情報に重きを置いた解説パネルを用意してしまうと、そのストーリーを壊すこととなり、観覧者の興味を引くことが難しくなる恐れがある。それらの資料の年代に関する情報を利用して、時系列や歴史に基づくストーリーを紡いだほうが、観覧者は、資料が展示されている意図を汲み取ることができ、その資料に興味を持つことができるだろう。伝えたいことが多くあったとしても、相手に興味を持ってもらい、耳を傾けてもらわなければ、何も伝えることができない。博物館は、情報を伝えるためにあるのではなく、人々が何かに興味を持つ、更には何かを学ぶ砦であるべきなのかもしれない。

### 3. 実習展を経験して

私が実習展で作った展示は「秤のれきし」と題した、秤という道具の歴史を伝えることを試みた展示である。江戸時代に使われていた棹秤と、昭和に生産されたキッチンスケールの2点を展示し、秤という道具を中心に、「物を測る」ということがどのように変遷したのかを伝えることを展示の趣旨とした。資料以外には、展示の概要とポスターのほかに年表と解説文を展示した。本章では、前章を踏まえてこの展示を振り返り、博物館展示における情報伝達が達成されていたのかということを検討したい。



まず、客観的にこの展示がどのようなものであったのかについて概観することから始める。この展示のストーリーは、実物資料である秤を、同じ道具を年代別に分類することに着目して構成されている。そのストーリーの主題となっているのが、「物を測る」ということだ。概要では、

人間のあらゆる営みにおいて、「物の重さを測る」ということは案外重要なことである。例えば重量をもとに薬の調剤や合金の作成が行われてきた。あるいは、日常生活で、料理をする際に重量をもとして必要な材料の量を知る。

しかし、「重さを測る」ためにはその重さを決定できる道具と、誰にでも通用する、統一された単位が必要である。本展示では、重さを測る道具である秤を中心に「物の重さを測る」ということの歴史を探る。

と書かれており、「物の重さを測る」という行為の歴史を探索することを目指すことを明言し、道具と単位についても言及している。また、年表のキャプションでは、秤と単位という二つの軸の年表が示されている。次に解説のキャプションでは、日本に秤が持ち込まれた経緯から、棹秤が頻繁に使われるようになった経緯、キッチンスケールが登場した経緯などが述べられている。これらがこの展示において提示された主な情報である。

では、これらの情報について、博物館展示の情報伝達という視点から検討する。まず、概要で示されているのが、博物館展示の土台となるストーリーの概要となっているが、これが展示のタイトルである「秤のれきし」と合致していない。この概要から読み取れるストーリーの概要は、「秤」ではなく「物の重さを測る」ということの歴史である。更に、解

説のキャプションでは、秤の歴史について述べられている物の、単位に関する歴史の情報がほとんど欠けており、年表の内容と合致できていない。これらの2点から、この展示は「秤の歴史」と「物の重さを測る歴史」という2つのテーマが混在していることが分かる。2章で明らかになった様に、博物館展示において提示されるべき情報は洗練されたものでなければならない。しかし、この展示で提示された情報は、重なる部分があるテーマではあるものの、2つのテーマに基づいた整理されていない情報であり、観覧者にメッセージを伝えることを妨げる要因となっており、博物館展示が担うべき、「情報の伝達相手に興味を持たせる」コミュニケーションが軽視されている。このように2つのテーマが存在していたのは、伝えたいことをすべて伝えようとした結果にあるのではないだろうか。

以上のことから、自身の展示について反省すると、博物館展示の土台となるストーリー設定が甘かったことと、情報の取捨選択ができていなかったことに改善点を見出すことができる。展示スペースが狭かったことや、資料が2点に限定されていたことなど、この展示の個別的な要因も考慮すると、「秤の歴史」に絞り、単位や物を測る文化の情報を捨て、秤そのものがどのように変わったのかというストーリー設定が好ましかったのではないかと考える。

#### 4. おわりに

私は、博物館実習の授業を通して、学芸員になるために必要なことだけでなく、他者に物事を伝えるために大切なことを学ぶことができたと考えている。特に実習展では、少ない情報で、他者に情報を伝えることの難しさを実感した。そして本論文では、学芸員は、取捨選択された情報をまとめることで、相手

に興味を持たせる展示を作る必要があることが明らかになった。このことから、実習展で私が伝えるべきだったのは、洗練された情報でつくられたストーリーであったということが分かった。学芸員になるという進路は選ばなかったので、展示を構成するという機会が人生の中で再度訪れるかどうかはわからないが、人に物事を伝えるというのは展示に限ったことではない。実際に、実習展が終わってから、他者とコミュニケーションを図る折々の機会、分かりやすく伝えるにはどうしたらいいか、ということを考えるようになった。情報を選び、本当に伝えたいストーリーに則って情報を整理して伝えることで、分かりやすい情報伝達が可能となり、相手が自分の伝えたいことに興味を持ってくれる。これは、学芸員にならなくても、様々な場面で生かすべき教訓であると考え。

## 5. 参考文献

里見親幸. 『博物館展示の理論と実践』. 同成社. 2014.

- 1) 里見親幸, 『博物館展示の理論と実践』, 同成社, 2014 : 21.
- 2) 同書 : 21.
- 3) 里見, 前掲書 : 24.
- 4) 里見, 前掲書 : 25.
- 5) 里見, 前掲書 : 21.

## 博物館実習を終えて自分の持ちたいギャラリーとは

経17-805 吉村 珠紀

今回、博物館実習を受講したのには、大きな理由がある。それは、将来自分のギャラリーを持ちたいという将来の目標が理由である。そのためには、美術資料の扱い方や展示方法、キャプションの作り方や、手入れ方法、調書の取り方、梱包、企画計画、など様々なことを知る必要があった。博物館実習を受講することで、美術に関する多くの事が学べ、将来に活かすことができるのではないかと考え受講した。

その結果、私は将来のためになる多くの事を学ぶことが出来た。その中でも私が将来のために活かしたいと思った授業が多くある。まず、北川博子先生の美術資料の扱い方の授業である。この授業では、美術資料がどのようなものでどれほど大切であるのか。その大切な美術資料をどのように扱うのか、調書の取り方、梱包方法を教えていただいた。こんなにも丁寧に扱わなければならないのか、こんなにも配慮が必要なのか、調書を取らなければ借用ができないのか、梱包にこんなにもルールがあるのかなど多くの学びがあった。次に、西川卓志先生・合田茂伸先生の展覧会の計画と博物館の印刷物についてである。この授業では展覧会の種類や役割、企画展を行う際にどのような手順を踏めばいいのか、展覧会のポスターやチラシなどの印刷物の作成方法、展覧会での印刷物の重要性などを教えていただいた。教えていただいたのは大雑把なものではなく、フォントのサイズや形、行間にいたるまで、今すぐにでも実践で使うことが出来るものばかりで、将来に直結するような内容で、とても勉強になった。次は、熊博毅先生の資料写真撮影の目的と方法であ

る。この授業では多くの撮影機材を用いて資料をどのように美しく、忠実に撮るのかを学んだ。その中でも、一番勉強になったのは、実際に博物館で行う実習展示である。今までの学習の集大成であり、より実践に近いこの授業は私の将来に直結するような学びが多く、とても勉強になった。その際に展示はひとりでできているわけではなく、様々な人の支えがあってできているのだと感じた。その後に行われた授業の中で、高田先生の自然史資料の保存と整理では、保存管理の方法も教えていただいたがそれ以外にも、オリエンテーションの方法や、年代ごとの楽しませ方のコツなど来館者に来てもらうための工夫などの実践的なことを教えていただいた。他にも、一瀬先生の展示評価の授業では今回の実習展の評価の他にも、企画を実際に立ち上げてみるという実践的なことも行い、こんなに多くのことを考えて企画展というものは行われていると勉強になった。今後、私がギャラリーを持つのは遠い話ではあるが、その際に博物館実習で学んだ実践的で基礎的なことを応用していきたいと考える。

上記で、将来ギャラリーを開きたいと述べていたが、ギャラリーの定義は何であるのだろうか。今回のレポートではギャラリーとはどのようなものなのか、博物館とはどう違うのかを述べる。そして、自分が目標としているギャラリーの「ROCKET」と「VOU」はどのようなものであるかを、自分が持ちたいギャラリーはどのようなものであるのか考える。その上で自分はどのようなギャラリーが行いたいのかを述べていく。

ギャラリーとは日本大百科全書によれば、

本来の意味は、建物の外側の歩廊、回廊をいうが、アレクサンドロス大王の時代に、収集した美術品をそこに並べたところから、美術品の展示場をいうようになった。現在では、美術の世界では美術館内の各室、もしくは美術商の展示スペースを意味するが、ロンドンやワシントンのナショナル・ギャラリーのように、大小美術館の名称そのものとなっているところもある。日本でも、江戸時代に京都東山で書画会が行われたのをはじめとして、美術展示が行われ始め、現在のようなギャラリーは「画廊」と呼ばれ大正時代より設けられた。ギャラリーというものは美術品を展示する場所であるということである。販売や入場料などのギャラリーを経営に関することは、ギャラリーの経営者が行うことで、ギャラリーのすべてが営利目的なものではない。

博物館とギャラリーの違いは何であるのであろうか。この問題は日本と海外では考え方に違いがあるため、今回のレポートでは日本の定義を述べる。日本では博物館は、国に定義が定められている。それは、「博物館は、資料収集・保存、調査研究、展示、教育普及といった活動を一体的に行う施設であり、実物資料を通じて人々の学習活動を支援する施設としても、重要な役割を果たしている。また、博物館は、歴史や科学博物館をはじめ、美術館、動物園、水族館などを含む多種多様な施設である。」というもので、日本に博物館はこの定義にのっとって博物館経営を行わなければならない。反対に、ギャラリーは個人の経営者が行っているため、国の規定などはなく自由に行うことができる。

このように、決められた定義がないギャラリーはどのようなコンセプトでどのように経営を行っているのだろうか。それを自分が目標としている実際にあるギャラリー「ROCKET」を見ていく。

ROCKETは、雑誌や広告のデザインを手掛ける株式会社CAPの子会社で1996年に設立された。日本の流行の発信地東京表参道ヒルズの中にある。「新しくて面白い」をコンセプトに現代アートを中心に展示をしている。ギャラリーとして美術品を展示販売するだけでなく、ファッションのポップアップや展示会場としても使用することができることもROCKETの特徴である。様々なジャンルのアーティストが自身のセンスや価値観を自由に表現できるスペースとして、1～2週間ごとに変わる企画内容で時代の流行が感じられる場所である。アート業界とファッション業界流行の最先端をいくようなギャラリーである。ROCKETでは今までに多くのアーティストの展示会を行ってきた。アーティストは若手アーティストが多く、若者をターゲットにしたギャラリーである。最近の企画展では、ふたごを被写体に写真を撮り続ける鈴木むらさきさんの写真展「ふたご写真〇〇」や、いろいろなことが普通ではなかった2020年、閉ざされた部屋の中で彼らは何を考えたのか若手クリエイター13名による合同展「宇宙ステーションで会うまで待ってて」、破棄されるはずだった花たちを集めて一つの作品にする flower design team “gui” の「色を纏う花展」、ポップで脱力感のある作風が今若者たちに人気のイラストレーターeryの「25 years old now」など幅広いジャンルの作品を展示している。ROCKETで企画展を行う多くのアーティストは若者たちから絶大な支持受けていたり、今からムーブメントを起こすであろうアーティストなのである。

次にもう1つのギャラリーの「VOU」についてみていく。京都出身の2人のアーティストが2015年に京都の中心街にギャラリーを設立させた。ギャラリーとショップが一緒になっており、ギャラリーと同じぐらいの面積を



持つショップは企画展のグッズやオーナーもアーティストであるため、オーナーがデザインしたギャラリーオリジナルグッズなどが販売されている。「友達の家」をコンセプトにしており、友達の家のように気軽に行けて、友達の家で何か新しいものを発見するような感情を抱いてほしいという願いを込められている。企画展は2週間～1か月おきにかわり、早すぎないのが特徴で、時代の流行の最前線に立つというよりはVOUのオーナーが好きなアーティスト、VOUで展示したいアーティストがオーナーと一緒に展示を作り上げ、発表しているようなギャラリーである。ターゲットはアートが好きな人すべての年代である。どの年代でも行けるぐらいの親しみやすさがあるのがVOUの特徴である。最近の企画展では、石彫作品の中にマンガというメディアを組み込み世の中に疑問にコミカルなアプローチを行っている小笠原周さんの個展「アサンブラージュ」や、様々な形の帽子を展示会場全体に並べてかぶってもらうまでを一つのアートとするノックの帽子屋の展示会「ノックの帽子屋の行商」など幅広く大きなものでも展示をしている。博物館でしか見られないような大きな作品が見られるギャラリーは数少ないであろう。VOUでは有名アーティストや若者に人気のアーティストが展示を多く行っている。その中には有名ではないけれど面白い作品を造っているアーティストも多くいる。アーティストを見つけだすように宝探しのような感覚で行けるのがVOUである。

ギャラリーの定義と2つの実際にあるギャラリーをみてどのようなギャラリーが持ちたいのかを述べていく。

将来、私の持ちたいギャラリーは上記で紹介したROCKETとVOUの間のようなギャラリーが持ちたいと考える。コンセプトは「文化祭が行えるアートギャラリー」である。流

行を造って時代の流れを取り込むような場所であるものの、近寄りがたい存在にはならず、学校に行くような気軽さ、若い世代の集まりではあるものの、どの年代の方でも来られるような幅広さをもっているもの。企画展では、1か月単位で企画替えを行い、アーティストにとっての文化祭のような発表の場でアーティストと一緒に作り上げるような企画展を行いたい。若いアーティストが集まり、発表したり、作品をつくりあげたり、語れるような場所になればいいと考えている。そのなかで自分も一緒に成長し作り上げていければより良いギャラリーになっていくのではないかと考える。これは、私の将来の目標の話で実現できるかわからない夢の話である。このギャラリーが持てるまでに相当な勉強をして、知識をつけて働いていかななくてはならない。そのためにも、博物館実習は必要なステップであったと考える。博物館実習で学んだことを今後活かしていける職業に就くためにも日々勉強を続けていきたいと考える。